

付論

愛知用水関連資料・完形資料の活用－歴史と展望－

A History of Reception of the Complete form Ceramic collection that ware excavated from the kiln sites in Aichi Prefecture, by Nagoya University in 1955-1962.

小川裕紀

Hiroki Ogawa

概要

愛知用水関連資料は 1955 年から 1962 年にかけて、愛知用水の建設に関連して、流域に分布する古窯跡群から採集・出土した古陶磁資料である。本稿では、これらのうち残存率や学術的価値の高い「完形資料」が、戦後期からバブル期にかけて、歴史的、産業的、美術的な要素によって評価されていった受容史や、バブル崩壊後－陶磁資料館増築開館後から、陶磁美術館への名称変更後にかけて、同資料の多義的な受容が失われて歴史的な価値評価に主体がおかれるようになった経緯を概観する。これらを踏まえて、同資料の今後の活用の在り方として、地域の文化資源として活用することや、美術品として再評価することを提議する。

本稿の目的

愛知用水関連資料・完形資料は、1955 年から 1962 年にかけて出現した古陶磁資料である。同資料の概要と保管史の一部については、本論で紹介した通りである。一方、同資料は出現後 60 年間にどのように評価され、人々に受け止められてきたのであろうか。愛知用水関連資料を博物館資料として確実に後世へ伝えるとともに、現在の時代状況に相応しい活用を行うために、本付論では同資料の受容史について完形資料を中心に概観して、同資料の活用に関する今後の在り方を探ることとしたい。

古窯跡調査時

愛知用水建設地域における古窯跡の分布・発掘調査実施の年次毎に、愛知県教育委員会より榑崎彰一氏ほか執筆の報告書が刊行された。同書では、愛知用水関連資料が完形資料を中心に文章と図版によって掲載されている。そこでは、「空白時代とされた我が国古代、中世窯業史の一頁が埋められ」との認識の下、遺構・遺物の正確な把握に基づく窯業生産の歴史の変遷－実証的な編年の構築が試みられている。本資料は、窯業考古学における基礎的資料として位置付けられたのである。

上記報告書は考古学における分布・発掘調査報告書の形式に則った構成・内容をもつ学術的文献であるため、考古学の専門的知識を持たない一般市民には理解が容易ではない。当時において、愛知用水関連資料の存在について広く普及する役割を担ったのは、新聞報道ではなかったかと思われる。本資料に

ついで新聞報道がおおくなされたのが、1960年夏の日本陶磁器博物館設立運動の折りである。

同運動は、東海地方の実業家、陶芸作家や陶磁研究者等が愛知県に対して陶磁器専門博物館の設立を求めたものである。博物館設立の根拠とされたのが、当時の陶磁器産業が愛知県の主要産業の一つで、かつ日本随一の規模をもつことによる産業・社会的要素と、愛知用水関連資料の調査研究によって同地方が古代においても大規模陶産地であったことが判明したことに基づく歴史的・文化的要素である。ここでは、愛知用水関連資料は「愛知県民ばかりでなく日本人がほこつてよい貴重な文化財であり」、「愛知県の陶磁器生産は、このような文化遺産を引きつぎ発展させてきたものにほかならない」と位置付けられている。同資料は、当時の産業・社会的状況に対して、歴史的文脈を付与する文化財としても位置付けられるに至ったのである。その中核的存在が、愛知用水関連資料・完形資料であった。

古窯跡調査後から陶磁資料館建設まで

愛知用水建設地域における古窯跡の分布・発掘調査が終了した後、愛知用水関連資料は名古屋大学において保管され、同大内で外部研究者の閲覧に供されるようになった。一方、一般市民に対する閲覧履歴は定かではないが、各種の陶磁全集本や各地の展覧会によって、本資料が普及していったと思われる。

日本では戦後期から高度経済成長期を中心に、陶磁を扱う美術全集本が相次いで刊行された。愛知用水関連資料がおおく掲載された巻本は『世界陶磁全集1』（河出書房新社・1958年）、『陶器全集31』（平凡社・1966年）、『陶磁大系5』（平凡社・1973年）、『日本の陶磁 古代・中世篇1』（中央公論社・1974年）、『日本陶磁全集6』（中央公論社・1976年）である。これらの巻本には榑崎彰一氏による猿投窯の編年の解説が所収され、愛知用水関連資料はその図版としておおく掲載されている。ここでは、同資料は日本陶磁史の基礎資料として位置付けられているといえる。一方、これらの巻本は美術全集としての性格上、カラー図版がおおく所収され、愛知用水関連資料・完形資料も掲載された。カラー図版に対しては“作品解説”が付記され、そこでは美術作品として造形要素に対する美的評価も行われている。同資料は美術品としての性格を併せ持つに至ったのである。

愛知用水関連資料の展覧会出品歴に関しては、1980年代までの詳細な状況を網羅的に把握することは困難である。図録等が作成された展覧会では、「奈良・平安・鎌倉・室町陶磁名宝展」（五島美術館・1962年）、「古代から現代までの ふるさとのやきもの展」（名古屋城天守閣・1966-67年）、「猿投古窯展」（石川県立美術館・1974年）が確認できる。これらの展覧会では、これまでに登場した各視点—歴史的、産業的、美術的な価値評価によって愛知用水関連資料が紹介されている。特に美術館の展示では「シャープな造形感覚は今日にも相通ずるものが多し」などとして、美的鑑賞対象として扱う視点が特徴的である。

なお、この時期の文献では、愛知用水関連資料出現の経緯を所収するものがみられることも特徴的である（『世界陶磁全集1』・『陶器全集31』・『日本陶磁全集6』、「ふるさとのやきもの展」・「猿投古窯展」）。特に猿投窯は戦後期において“発見”・命名された古窯であったために、資料出現の経緯について記述する必要があったことによるものと思われる。これらの記述によって、愛知用水関連資料は愛知用水建設等の経緯とともに認識されていたともいえるだろう。

陶磁資料館開館から増築開館前まで

1977年10月に名古屋市博物館、1978年6月に愛知県陶磁資料館が開館した。前者の開館記念特別展として「東海の古陶 土と炎の美」、後者では「日本の陶磁」が開催され、両者ともに愛知用水関連資料・完形資料がおおく出品されている。また70年代末から80年代初頭にかけて『世界陶磁全集2』（小学館・1979年）、『原色日本の美術22』（小学館・1980年）、「猿投窯展」（愛知県陶磁資料館・1981年）が相次いで刊行・開催され、同資料が掲載・出品された。さらにバブル経済期には同資料が多数出品された展覧会「愛知の古陶 猿投・瀬戸」（愛知県陶磁資料館・1989年）、「中世陶器の源流 猿投」（MOA美術館・1990年）が開催されている。

こうした文献や展覧会を通じて、愛知用水関連資料・完形資料を歴史的、産業的、美術的な要素によって評価する視点が深められていくとともに、愛知県・東海地方・日本国といった空間的領域意識や、考古学による歴史叙述・窯業史・陶芸史といった時間的認識枠組みもまた強化されていったのではないだろうか。一方、これらでは愛知用水関連資料出現の経緯に関する記述が認められない。これは1960年代から1970年代にかけて、猿投窯の存在自体が定着していったことによるものと思われるが、他方で同資料に対する認識の総体から資料出現の経緯という文脈が忘れられていくことともなったのかもしれない。

「猿投・瀬戸・全国古窯陶磁資料展」の開催

1989年度に愛知県陶磁資料館拡充整備検討会議が、「陶磁資料館基本計画」（拡充基本計画）を策定した。ここでは、「愛知県陶磁資料館の特性を一層際立たせるため、猿投・瀬戸窯等の常設の出土品展示コーナーを設ける」ことが定められた。これに基づき、1994年7月から愛知県陶磁資料館は本館2階第6展示室において常設展「猿投・瀬戸・全国古窯陶磁資料展」を開会した。同展は「実物をとおした生きた陶器辞典」を目指し、全国各窯業地の特徴を示す陶片及び完器が約1,600点展示された。展覧会名称が示すように、展示室では古代猿投窯及び中近世瀬戸窯を大きく取り上げ、窯式・様式編年の体系が実物資料によって示された。この展示の中核となったのが愛知用水関連資料であり、完形資料の大半が同展で常設展示紹介された。同展は古窯の地域別展示であり、古陶磁の資料について各地の陶磁器産業の源流としての歴史的価値に焦点をあてたもので、美的評価は参照されなくなった。猿投窯・瀬戸窯展示において、古陶磁資料は編年展示の素材であり、陶磁資料館への寄贈・貸与資料を除く各資料の来歴もほとんど参照されなくなった。ここにおいて愛知用水関連資料は歴史的、産業的な価値評価に主体をおいて紹介されることとなったのである。

2004年末に「猿投・瀬戸・全国古窯陶磁資料展」は展示面積を半分に圧縮したが、古代猿投窯・中近世瀬戸窯編年展示については内容・規模を維持した。翌2005年春には瀬戸蔵ミュージアムが開館して、常設展「瀬戸焼の歩み」が開会した。同展は陶磁資料館「全国古窯陶磁資料展」の古代猿投窯・中近世瀬戸窯編年展示を拡充させた内容で、愛知用水関連資料も完形資料1点をはじめ多数常時展示されることとなった。

1990年代以降はかつてのような陶磁美術全集本の刊行はなされていないが、特筆すべきは1990年代末から愛知県による『愛知県史』が順次刊行されていることである。古代から近世の窯業史については『愛知県史 別編 窯業』として2007年に「窯業2 中世・近世 瀬戸系」、2012年に「窯業3 中世・近世 常滑系」、2015年に「窯業1 古代 猿投系」が刊行された。これらは戦後以降の愛知県における窯業考

古学研究の集大成というべき内容・規模をもつもので、愛知用水関連資料も各巻で多く所収されている。同書は基礎資料の集成としての性格が強く、各古窯跡の調査年や調査機関、さらには出土資料の現在の保管者を明記している点特徴的である。刊本自体は古陶磁資料の歴史的評価を中心としているが、代表的な製品を掲載する口絵図版と併せて、古陶磁資料の多義的な評価に向けて開かれているといえよう。

陶磁美術館への名称変更後

2013年6月、愛知県陶磁資料館は愛知県陶磁美術館へ館名を変更した。これを受けて同館では美術品としての陶磁展示が強く志向されるようになり、2014年度から常設展示のリニューアルが断続的に行われることとなった。こうした中、2014年9月をもって「猿投・瀬戸・全国古窯陶磁資料展」は終了し、翌月からは常設展「日本と世界のやきもの」内の通史部門・日本における一展示コーナー「古窯陶磁資料展示コーナー」として改編の上展示公開されることとなった。同展示では旧来の古代猿投窯・中近世瀬戸窯編年展示は展示面積が大幅に縮減され、愛知用水関連資料・完形資料の出品点数も大きく減少した。猿投・瀬戸は他窯に比しては展示規模が大きいものの、古代中世諸窯の主要な一部としての扱いとなった。

「古窯陶磁資料展示コーナー」は概ね時代別展示として構成され、完形古陶磁による日本古陶磁の通史展示を補完するような形となった。一方、常設展「日本と世界のやきもの」には「名品鑑賞部門」が設けられ、古陶磁が美術品として鑑賞に供されるようになったが、これまで同部門に愛知用水関連資料・完形資料が出品されたことはない。陶磁美術館本館常設展において、同資料は日本陶磁史における歴史的な価値評価に主体をおいて展示紹介されることとなったのである。

小結

愛知用水関連資料・完形資料は戦後期からバブル経済期にかけて、歴史的、産業的、美術的な要素によって評価された。これは、陶磁器産業が愛知県における基幹的な産業の一つであり、日本国の陶磁器産業が輸出産業でもあった経済・社会的状況を踏まえた受容形態である。その後、こうした多義的な受容は失われて今日に至る。これは、バブル崩壊後の愛知・日本における陶磁器産業の縮小を反映しているのかもしれない。しかし、現行の歴史的評価受容は、こんにちの社会・文化の状況へ積極的に対応した位置付けとは思われず、前時代の状況下に構築された日本陶磁史上の歴史的評価をなぞるようなコスプレ的受容状況であるといえる。愛知用水関連資料・完形資料を現在の時代状況に相応しく活用するためには、現在は参照されなくなってしまっている美術的要素や、地域における文化的資源としての意義を再評価する必要があるのではないだろうか。

今後の活用

こんにち、愛知用水関連資料は市民からどのようにまなざされるようにしたらよいのだろうか。もちろん、博物館資料は、その多義性を利用者から自由に解釈されるべきものである。しかし、公立美術館は広義の公教育機関であり、近代公教育の理念や各美術館の設置目的、使命に基づいて、資料受容の方向性を示唆する必要があるだろう。本項では、本稿で確認した受容史を参考に、今後の活用方法について若干の提案を行う。

まず、地域における文化的資源としての再評価である。ここでは、愛知用水関連資料の性格に鑑み、現在の行政単位である市町村の枠とは異なる、「地域」の単位を把握するためのツールとしての活用を提案したい。例えば、猿投窯の窯跡はその分布と消長から東山、岩崎などの地区に区分して整理されているが、この区分は現行区市町の境界を超越するものが多い。本資料によって窯跡の分布区分—現在の行政単位とは異なる「地域」を提示することを通して、「地域」について新たな視点を提示することができるだろう。また、本資料は愛知用水建設に関連して現出したものであることから、愛知用水との関連において資料を提示することも有効であろう。ここでは、現行の用水路「流域」という視点によって、現行区市町や旧郡等とは異なる地域のまとまりとつながりを提示することができる。所与の地域区分の再確認や、定説たる窯跡分布区分の学習ではなく、本資料を活用した新たな「地域」の発見こそが目指されなければならないだろう。

次に、美術品としての再評価である。ここでは、資料の多義的な解釈を前提とした活用と、公立の陶磁専門美術館としての現時点での提示評価に基づく活用が考えられる。前者では、古陶磁鑑賞史とこんにちの美術教育・鑑賞教育における対話型鑑賞を踏まえた、鑑賞作品としての活用を提案したい。古来、日本では古陶磁に対して中近世の唐物賞玩、茶陶古陶磁、近代の鑑賞陶器、民藝運動、骨董趣味といった様々な視点から賞玩されて、鑑賞の眼差しが積み重なってきた。一方、現在の小中学校や同年齢層を対象とした美術館での鑑賞学習は、作品の造形要素、特に形と色からイメージを自由に展開する活動が中心となっており、高学年では作品のよさや美しさを感じ取ることも目指されている。愛知用水関連資料は出現から既に50年以上の年月が経過し、この間に様々な評価が行われてきた。そうした閲覧履歴（ヒストリー）を意識しつつ、これに列なるものとして個々人が資料の造形要素をもとに自由な解釈を加えていくことは、資料を媒介とした、個人の感性と知性、そして歴史意識の涵養に資することであろう。

ところで、博物館の社会的機能を歴史的に考察する研究書が近年相次いで上梓された。これらでは、現在の世界や日本におけるグローバリゼーション、消費社会、サブカルチャーの進展を背景として、博物館における近代国民国家の形成、再生産機能の終焉が提示されている。しかし、本当にそうなのだろうか。確かにこんにち、日本人は日常的には国家を単に行政のことと思ひなすことがおおいようだ。だが、従来の福祉国家型社会保障が機能不全となり、同質的な国民・国民国家像が変容したからといって、近代国民国家が消滅した訳ではないのだ。近代国民国家を維持し再生産していくためのシステムの一つが近代公教育であり、近代公教育が担う国民の言語の共通化、知識・技術の標準化、文化の同質化といった機能は、グローバリゼーションが進行する世界や日本においてますます重要なものとなっている。公立美術館は社会教育機関の一部門であり、こうした機能の一翼を担う責務がある。付言すれば、現在の日本における社会教育の基本理念—市民の自主的・自発的な自己教育活動・相互教育活動を基礎とする—は、多分に戦前期・末期の反動として戦後初期に設定されたものであり、先年の教育基本法全部改正を踏まえ、今日の社会状況に応じて見直す必要があるだろう。

以上を踏まえ、今日では聊か反動的なイメージをもつ提案となるが、愛知用水関連資料・関係資料を地域や日本の古美術作品として位置付け、地域文化ないし日本文化の特質を語るアートワークとして一般の鑑賞に供することを提議したい。もちろん、こうした鑑賞活動が排外主義へと傾くことを防ぐために、“やきもの大国日本”などといった自国・自文化中心・優等的な文脈ではなく、地域文化ないし日本文化における陶磁の特徴的な事実の提示を第一とする必要がある。また、他陶磁資料を併用して、多

文化理解についても配慮することも有効である。こうした点に留意しつつも、鑑賞者が愛知用水関連資料・関係資料を通して把握した地域文化ないし日本文化の特質を「地域文化ないし日本文化のよさ」として理解することによって、地域ひいては国家における社会秩序が維持・向上し、社会力、さらには国力（経済力、軍事力、情報力、社会力、政治・外交力）の拡充へと結実するであろう。古陶磁を文化資源として広く機能させるためには、広く社会に作用する目的と手段を追及し続けなければならないのだ。

付記

愛知用水関連資料・完形資料の活用については、本稿執筆と並行して検討と試行を進めている。陶磁美術館・南館2階展示室常設展「あいち子ども考古学研究室」では平成27年から展示コーナー「愛知用水工事と文化遺産」を設置し、現行の愛知用水と愛知用水関連資料を関連付けて展示紹介する小展示を開始した。本展示は平成27年末にいったん終了したが、28年2月から展示室の新たな常設展「愛知のやきもの1万年」において、同コーナーは展示内容を拡充させて再開している。また、陶磁美術館・学校出前講座「やきものの鑑賞」においても、平成28年度には鑑賞教材の一部として同資料を用いることを検討している。近い将来には、陶磁美術館・本館常設展「日本と世界のやきもの」の「名品鑑賞部門」に愛知用水関連資料・完形資料を出陳し、同資料を日本古陶磁の優品として鑑賞に供することも考えたい。